

〔提 言〕

## 家族看護学の成長に伴う痛み

東海大学健康科学部

鈴木 和子

21世紀になって最初の「家族看護研究」誌の提言に相応しいテーマかどうか分からないが、昨年、家族看護研究の動向と課題について小稿をまとめる機会があつて感じたことや家族看護学専攻の大学院生が必ずぶつかる悩みに接したときに、このテーマが浮かんだ。

国内外の家族看護研究の動向を概観して、確かに家族看護学は成長していることを実感した。しかし、その一方で、相変わらず家族看護と個に対する看護との違いについて、看護職同士でも理解されていないという現実にあつてることが多い。大学院の学生も他の領域の看護学の教員に、対象が家族とは言つても実際は個人ではないのかと問いつめられたり、他の領域のCNSでも家族を対象として援助しているから、家族看護のCNSは不要であると言われたと訴える。その度に、家族看護に対する最初のブームは終わって、今や一人前になるための大きな試練を通過している時代に入ったという思いがする。

確かに、家族看護学の教員をしている自分でも、ときに家族看護の本質は何かを忘れがちであり、家族看護に対する多くの疑問に即答できているかという自信がない。しかし、一つだけ忘れないでいたいことは、患者を含む家族という集団が、いかに一つのまとまりとして他にかげがえのない役割や機能を持ち、それも目に見えない関係性のネットにつながり

合いながら健康問題や課題に取り組んでいるかということである。従つて、家族の一人である個人にケアしていても、家族看護では、いつもその影響がその人の属する第一次集団である家族全体に及ぶということ意識してケアしていること(システム思考)が、家族看護の本質であり、それが個人を対象にし家族はバックグラウンドにあるという、いわゆる個の看護との大きな違いであろう。

この視点は、家族看護研究においても同様に極めて重要である。看護の多くの領域で、家族に関する研究は盛んに行われるようになって、家族看護研究の独自性とは何かをきびしく問われることが多くなってきたが、家族成員の一人から得たデータをいかに家族としてのデータとして活かすかは、研究者のシステム思考に大きく依存している。また、一方、複数の家族成員を対象とした面接場面や家族同士の会話記録を素材とした研究も試みられ始めている。

このように、家族看護学は、実践、教育、研究のいずれにおいてもアイデンティティ確立のための試練の時代に入り、それに伴う成長の痛みを味わっているのではないだろうか。この試練のときは、しばらく続くであろうが、それを乗り越えるために本学会は、会員同士の仲間づくりという表出的役割と有効な情報交換という手段的役割を担ってくれると信じている。